

## 壺井栄賞

### 「コーダ」の僕が見る世界を読んで

小豆島町立小豆島中学校二年 松下 侑愛

この本を読むまで、私は「コーダ」という言葉を知りませんでした。コーダとは、「耳が聴こえない、あるいは聴こえにくい親のもとで育った聴こえる子どもたち」のことです。『コーダのぼくが見る世界』の主人公である「ぼく」もその一人で、彼の視点で語られる日常には、多くの驚きと気付きがありました。

私が一番心に残っているのは、「ぼく」が小さいころから家族の「通訳」をしているということ。病院や役所で大人同士の会話を代わりに伝えたり、書類の意味を説明したりするのは、想像以上に大変なことだと思いました。けれども「ぼく」は、その役目を当たり前のように受け入れていました。家

族を助けたという気持ち、自然にそうさせているのだと感じました。

この本を読んでいたちょうどその頃、私は母と一緒に「夏休み親子手話教室」に参加しました。初めはあいさつなどの簡単な表現しか分からなかったのですが、先生や周りの人たちと練習するうちに、少しずつ会話らしいやり取りができるようになりました。手の形や動きだけでなく、表情や口の動きも大切だということを知り、手話はただの「言葉の代わり」ではなく、全身を使ったコミュニケーションなのだ実感しました。その中で、手話だけで自己紹介をする時間がありました。自分の名前や好きなものを表現するのにとっても緊張し苦労しましたが、相手がうな

ずいて受け止めてくれた瞬間、大きな喜びを感じました。その時「伝わる」ということの意味を改めて考えさせられました。声を出さなくても気持ちは届くのだという経験は、私にとって新しい発見でした。また、手話教室では、耳の聴こえない方と直接交流する機会もありました。手話を通して語り合ったり、分からないところを教えてもらったりする時間はとても貴重でした。初めは「間違えたらどうしよう」と不安でしたが、相手が優しく受け止めてくれたことで、少しずつ自信がついてきました。手話を学ぶことは、人と人との距離を近づけてくれる大切な架け橋のように感じました。そして私がこの教室で一番驚いたのは、「耳が聴こえない人は音を知らない」ということでした。今まで私は、耳が不自由な人も、何かしら音のイメージをもっているのではないかと思っていました。けれども、それは私の思い込みでした。例えば、雷の音や音楽のメロディなど、私

が当たり前のように聞いている音を、全く知らない人がいる。それを知った時、私は言葉にできないほどのショックを受けました。私達は、毎日耳から多くの情報を得ています。目覚まし時計の音、電車のアナウンス、家族や友達の声、どれも当たり前前に聞こえているものばかりです。しかし、聴こえない人たちにとっては、それらの音がすべて「ない世界」で生活しているのだと分かった時、私の中で何かが変わった気がしました。例えば、道に落ちた小銭の音、名前を呼ぶ声、背後から近づく車の音なども、聴こえなければ気付くことすらできません。一つ一つの「聴こえる」ことが、実はとても大きな意味をもっているのだと改めて気がされました。

手話教室での体験は、とても短い時間でしたが、「耳が聴こえない」ということの意味を、今までよりもずっと深く考えるきっかけになりました。私は、手話を通して「伝えることの大切さ」を学んだだけでなく「相手の世界を想像することの大切さ」を学ぶことがで

きたと思います。

このことを思い出しながら、『コーダのぼくが見る世界』をもう一度読み返すと、ぼくが親の代わりに、聴こえたことを伝えるという行動は、どれほど重要で特別なことなのかをより深く理解することができました。手話は「言葉を訳す」だけでなく、「音の世界」を伝える大切な役割なのだと思います。さらには、コーダの人たちは「聴こえない世界」と「聴こえる世界」の間に立ち、時には迷い、苦しむことがあることを知りました。それでも家族を支え、自分自身の生き方を探している姿に強く心を動かされました。

この本との出会いと手話教室、これら二つの経験は、私にとって忘れられない学びになりました。私たちは普段、自分の「当たり前」だけで物事を考え、てしまいがちですが、それは、他の人にとっては当たり前ではないこともあると思います。だからこそ、相手の立場に立って考えること、想像することで、分かり合おうとする努力がとても大切だと思えます。

これからも私は、もつと手話を学びたいと考えています。耳の聴こえない人やコーダの人たちがどんな思いで毎日を過ごしているのかをもつと知り、その人たちに寄り添えるようになりたいと思います。そして、いつかは、私自身が「伝える側」として、手話の魅力や大切さを広めていきたいです。『コーダのぼくが見る世界』は、そんな思いを私にくれたとても大切な一冊になりました。